

日本周辺国際魚類資源調査委託事業

久野正博・久保典敬・田岡明将・井上勇人・大野恭我・平工智一・北村勇人

目的

太平洋を広く回遊するカツオ・マグロ類について、資源評価や資源動向の予測、我が国周辺への来遊量の予測等を行うために必要な科学的情報を収集、整理することを目的とする。

方法

1 沿岸域における漁獲実態調査

県内におけるカツオ・マグロ類(クロマグロ、キハダ、メバチ、ビンナガ)の主要水揚港である和具、浜島、宿田曾、奈屋浦、紀伊長島、尾鷲の各港において、漁業種類別の水揚状況を調査した。また、クロマグロの加入状況を把握するため、クロマグロ養殖用種苗の採捕状況を調査した。

2 沖合、遠洋漁場における漁獲実態調査

沖合、遠洋漁場における中型、大型竿釣船の漁獲動向については、三重県漁労通信連合会及び近海漁労通信会所属の標本船から「無線漁況連絡聴取簿(QRY情報)」の提供を受け、カツオ・ビンナガ漁船の月別、旬別稼働隻数及び漁獲量を緯度・経度毎に整理し、漁場の推移や漁況について調査を実施した。

結果及び考察

収集したQRY情報をもとに、本県所属船のカツオ・ビンナガ竿釣漁場の変遷を「令和4年における三重県中型・大型竿釣船のカツオ・ビンナガ漁況総括」としてとりまとめ、漁場探査の参考資料として関係漁業者に提供した。また、カツオ・マグロ類の漁獲動向を水産資源研究所に提供した。これらのデータは、太平洋におけるカツオ・マグロ類の資源量評価及びそれに基づく資源管理方策を検討する国際会議において活用されたほか、日本周辺海域への来遊量予測の科学的根拠としても利用された。資源評価や来遊量予測に関する結果の詳細については、関連報文で報告されることから、ここでは本県所属船の2022年(令和4年)漁期におけるカツオ・マグロ類の漁況概要をとりまとめた。

1 沿岸域における漁獲実態調査

1) 沿岸曳縄船

2022年における三重県主要4港(和具・浜島・紀伊長島・尾鷲)の沿岸曳縄船によるカツオ水揚量は40.7トン

で、前年(184トン)及び過去10年平均値(85トン)を下回り、過去10年では極端な不漁であった2015年に次ぐ低調な漁であった(図1)。主要4港の水揚量と水揚隻数から求めた年間の平均CPUEは、32kg/隻と前年(50kg/隻)を大きく下回った。曳縄で漁獲されたカツオの銘柄は9月まで特大(4kg以上)と大(2.5~4kg)が主体であった。

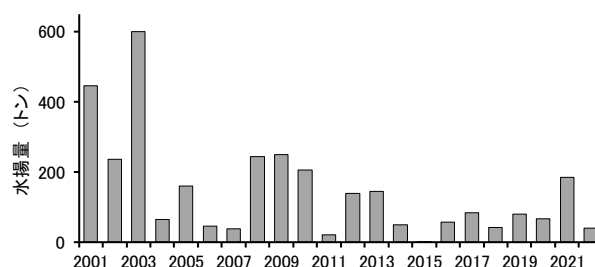


図1. 沿岸曳縄船による主要4港のカツオ水揚量(2001~2022年)

2) 小型竿釣船(19トン以下)

2022年における三重県主要4港(和具・浜島・紀伊長島・尾鷲)の小型竿釣船によるカツオ水揚量は1,126トンで、好漁であった前年(920トン)を上回り、過去10年平均値(510トン)の約2.2倍の水揚量となった(図2)。1999年以降では2000年に次ぐ好漁となり、過去20年で最高の水揚量であった。主要4港の水揚量と水揚隻数から求めた年間の平均CPUEは1,197kg/隻で過去10年平均値(1,003kg/隻)を上回った。県内市場の水揚げデータによれば、4~11月の魚体は、銘柄特大(4kg以上)が主体であり、銘柄中(2~3kg)以下は少なかった。主漁期の5~8月の尾叉長組成を図3に示した。漁場は4月から10月まで、熊野灘沖の浮魚礁No.2海域に集中していた。

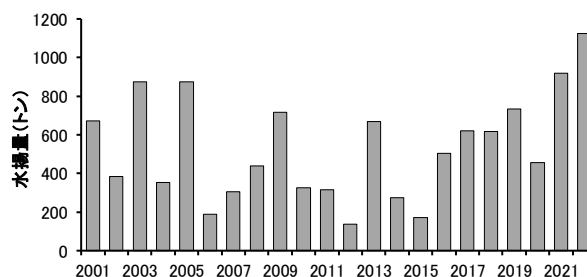


図2. 小型竿釣船による主要4港のカツオ水揚量(2001~2022年)

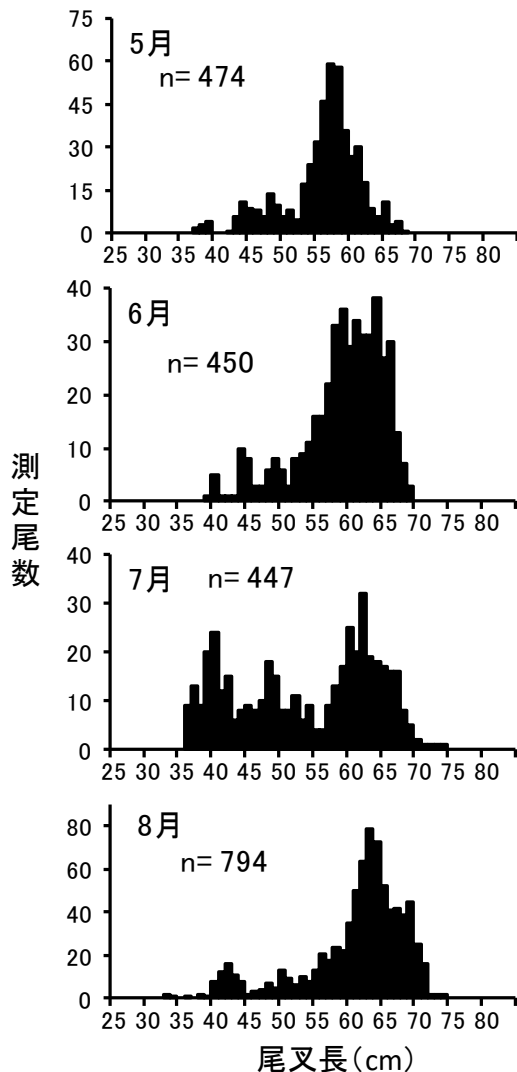


図3. 2022年5~8月に三重県海域で漁獲されたカツオの尾叉長組成

3) クロマグロ漁業種類別水揚げ状況

2022年の三重県主要6港のクロマグロ水揚量(全漁業種)は26.3トンで、前年(9.9トン)の266%、過去10年平均(14.2トン)の185%で、低調な漁獲が続いていた過去5年を上回った。例年通り、漁獲物の大半はヨコワ(体重10kg未満)であり、大型魚の漁獲は少なかった。主な漁業種類は、沿岸曳縄、定置網、まき網であった。

4) クロマグロ養殖用種苗(ヨコワ)の採捕状況

熊野灘沿岸域における2022年のクロマグロ養殖用種苗(ヨコワ)の採捕(曳縄)は、前年より11日遅い7月16日から始まり、前年より11日遅い8月28日に終漁した。標本漁協所属船によるヨコワの活け込数量は3,116尾で、前年の42%であった。採捕尾数と有漁隻数から求めたCPUEは4.7尾/隻で、前年(9.0尾/隻)及び前々年(6.7尾/隻)を下回り、低下傾向に戻った(図4)。

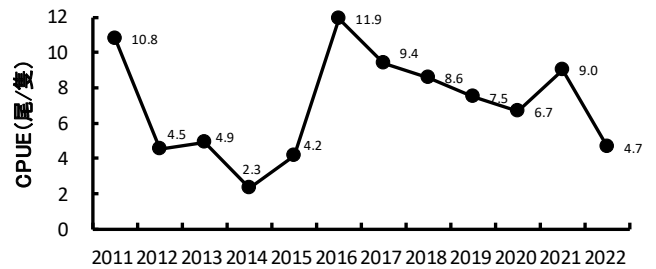


図4. 標本漁協所属船によるクロマグロ養殖用種苗(ヨコワ) CPUEの経年変化

2 沖合漁場における漁獲実態調査

沖合、遠洋漁場における漁獲実態調査のうち、ここでは沖合漁場の調査結果を報告する。QRY情報に基づく2022年の三重県中型竿釣船によるカツオ漁獲量は3,442トンで、前年(6,624トン)の52%、過去10年平均(5,797トン)の59%で、極めて低調であった一昨年に次ぐ低調な漁獲量となった(図5)。操業は、2月には南西諸島の東(N26~29° E129~132°)に集中し、3月も同海域を中心に、硫黄島の南(N23° E142°付近)でも操業した。4月に入り、漁場は北上し、九州の南から東海沖(N27~34° E128~139°)で操業した。5月には東海沖から伊豆諸島の西側(N30~34° E135~140°)を中心に操業し、伊豆諸島の東での操業もあった。6月は房総半島東沖(N33~38° E143~149°)を中心に操業し、7月以降は東北沖(N35~40° E142~154°)に漁場が移動し、10月には潮岬沿岸でも操業した。

また、2022年の三重県中型竿釣船によるビンナガの漁獲量は848トンで、前年(1,600トン)の53%と低調であった。

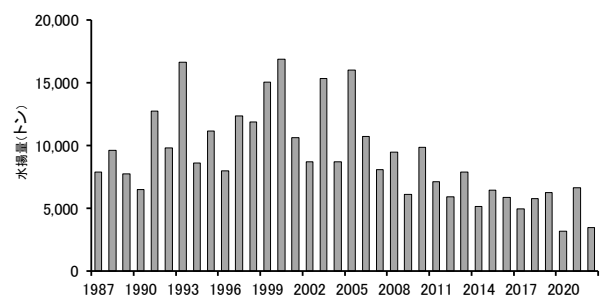


図5. 三重県中型竿釣船によるカツオ漁獲量(1987~2022年)

関連報文

令和4年における三重県中型・大型竿釣り船のカツオ・ビンナガ漁況総括、三重県水産研究所(2023)。